

第 17 回ファカルティ・ディベロップメント報告書

第17回ファカルティ・ディベロップメント報告書

2023 年 11 月 京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻教務委員会

第 17 回ファカルティ・ディベロップメント報告書

1. 開催概要

第 17 回 京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻ファカルティ・ディベロップメントは「シラバス作成」をテーマとして実施した。本年度は名古屋大学大学院医学系研究科総合医学教育センターの宮地由佳先生を講師に迎え、講師による講演とグループ・ディスカッションの構成とした。

事前に、職位、分野、教員歴、シラバス作成経験、シラバス作成における工夫や作成にあたり困難だと感じている点等に関するアンケートを実施し、講演の準備のための参考情報とした。

当日は、講演に先立ちの今中雄一専攻長による開会の挨拶に引き続き、西浦博教務委員長から今年度のファカルティ・ディベロップメントのテーマ選定の経緯に関する現状の認識と問題意識を通して、このテーマの意義、展望に関する説明があった。その後、講師の宮地由佳先生から「シラバス再考 カリキュラム構築論の潮流から」と題する講演といただき、質疑応答が行われた。続いて事前に本年度使用されているある授業のシラバスを資料として改訂するならばどのような点か、シラバスの作り方（使い方）、学んだことをこれからのシラバス作成にどう活かすか、について、職位や分野が異なる 4 名程度グループを構成したグループによりグループ・ディスカッションを行った後、各グループで議論された内容を報告することで参加者全員が議論内容を共有し、講師からのフィードバックを受けた。最後に、今中雄一専攻長による総括にて閉会した。

後日、事後アンケートを行い、専攻内で科目のシラバス作成に関する基礎資料として集計した。

2. 出席者（敬称略） 39 名

医療疫学：小川 雄右、山田 淑恵、板谷 崇央

薬剤疫学：川上 浩司、中尾葉子、高山 厚、水野 佳世子

医療経済学：今中 雄一、佐々木 典子

医療倫理学・遺伝医療学：中島 健、小川昌宣

健康情報学：中山 健夫、高橋 由光、西川 佳孝、當山 まゆみ

環境衛生学：西浦 博、林 克磨、小林 鉄郎、岡田 雄大、茅野 大志

健康増進・行動学：古川 壽亮、田近 亜蘭、坂田 昌

社会疫学：近藤 尚己、井上 浩輔、長谷田 真帆、佐藤 豪竜、本多 由起子

予防医療学：中神 由香子

知的財産経営学：早乙女 周子

医学コミュニケーション学：岩隈 美穂

ゲノム医療学：川崎 秀徳、鳥嶋 雅子、吉田晶子

臨床統計学：田中 司朗、大森 崇

第 17 回ファカルティ・ディベロップメント報告書

国際化推進室：河野 文子

フィールド医学：坂本 龍太

産業厚生医学：岡林 里枝

3. 資料

1. 講演スライド

宮地由佳（名古屋大学大学院医学系研究科 総合医学教育センター）「シラバス再考 カリキュラム構築論の潮流から」

2. グループ・ディスカッションで用いた作業ボード

3. 事前・事後アンケート集計報告

【開催プログラム】

第17回 ファカルティ・ディベロップメント・プログラム

場所：Zoom 開催

日時：2023年11月10日（金）

司会：教務委員長 西浦 博 先生

9:30-9:35

1. はじめに 専攻長 今中 雄一 先生

9:35-9:45

2. 本年度のファカルティ・ディベロップメントについて 教務委員長 西浦 博 先生

9:45-10:30

3. 講演：「シラバス再考：カリキュラム開発論の潮流から①」

講師：宮地 由佳 先生（名古屋大学大学院医学系研究科 総合医学教育センター（非常勤研究員））

10:30-10:40

1. 質疑応答 ①

10:40-11:10

2. 講演：「シラバス再考：カリキュラム開発論の潮流から②」

講師：宮地 由佳 先生（名古屋大学大学院医学系研究科 総合医学教育センター（非常勤研究員））

11:10-11:20

3. 質疑応答②

11:20-11:30

4. 休息

11:30-12:00

5. グループ・ディスカッション

12:00-12:20

6. 各グループ発表

12:20-12:30

終わりに

資料 1 講演スライド

宮地由佳（名古屋大学大学院医学系研究科 総合医学教育センター）
「シラバス再考 カリキュラム構築論の潮流から」

スライド 1

シラバス再考

カリキュラム構築論の潮流から

宮地由佳

スライド 2

このセッションが終わるころには、おそらく…

1. シラバスとそれを作成する目的がわかり、それを作成する（かもしれない）教員としての自分のあり方に納得できる。
2. カリキュラムの構築プロセスの全体像 が少し具体的にイメージできるようになる。
3. カリキュラムの構築の代表的な概念が少しわかる。
 - － アウトカム/コンピテンシー基盤型教育 など

第 17 回ファカルティ・ディベロップメント報告書

スライド 3

- 前半（45分）＋質疑応答（10分）
 - ✓ カリキュラムとシラバスはどう違うのか
 - ✓ 「シラバスチェック」はなぜ必要なのか
 - ✓ アウトカム/コンピテンシー基盤型教育とは
- 後半（30分）＋質疑応答（10分）
 - ✓ アウトカム/コンピテンシー基盤型教育の潮流におけるシラバス
- グループ・ディスカッション
 - ✓ どのように改善するか？どのようなリソースが必要か？
 - 何が障壁になりそうか？

疑問やご質問はぜひその場でチャット欄へ
お願いいたします

スライド 4

宮地 由佳 みやち ゆか

- 埼玉県出身 滋賀県米原市在住
- 2007年 新潟大学卒
- 家庭医療専門医、緩和医療認定医
- 2013年－2017年 京都大学医学教育・国際化推進センター
- 2014年－2016年 マーストリヒト大学 医療者教育学修士
- 2017年－2018年 エジンバラ大学 MSc Science and Religion
- 2018年10月－2020年3月 京都大学医学部付属病院緩和医療科
- 2021年 医学博士
- 家庭医療、緩和医療、医学教育

スライド 5

Q. シラバスとはなにか？

スライド 6

カリキュラムとどう違うのか？

• Curriculum：走路（ラテン語：curriculum）、走ること（currere）



出典：松下佳代先生(2018) FCME 講義スライド 4

スライド 7

**カリキュラム＝「学習者に与えられる学習経験の総体」
としての多層性**

① 計画された/意図されたカリキュラム
＝ シラバス



出典：松下佳代先生(2018) FCME 講義スライド 5

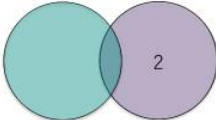
スライド 8

**カリキュラム＝「学習者に与えられる学習経験の総体」
としての多層性**

1. 計画された/意図されたカリキュラム

② 実施されたカリキュラム

- ✓ 学習者は、他者（指導者や他職種、患者、地域住民など）との現場でのやりとりの中でも学ぶ
- 「計画されたカリキュラム」 < 「実施されたカリキュラム」



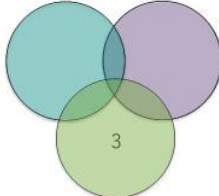
出典：松下佳代先生(2018) FCME 講義スライド 6

スライド 9

カリキュラム = 「学習者に与えられる学習経験の総体」
としての多層性

1. 計画された/意図されたカリキュラム
2. 実施されたカリキュラム
3. 学ばれた/達成されたカリキュラム

✓ Hidden curriculum



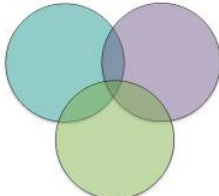
出典：松下佳代先生(2018) FCME 講義スライド

スライド 10

カリキュラム = 「学習者に与えられる学習経験の総体」
としての多層性

特に1（計画された/意図された）カリキュラムと
3（学ばれた/達成された）カリキュラムの重ならなさ

- a. むしろそれで良い
- b. 管理すべき



スライド 11

Q. なぜ「シラバスチェック」？

スライド 12

近年の教育をめぐる潮流：政策側

- 景気後退、グローバル経済競争の激化
- 高い生産性、付加価値、技術革新を支える知識やスキルをもつ労働力の育成が政策課題に
- 教育・職業訓練に対する教育投資の重要性の増加
- 教育予算獲得の裏づけと費用対効果の説明責任として、説得力のあるデータが求められるように
(cf. エビデンスに基づいた政策)

(OECD教育研究革新センター 編, 2010)

11

スライド 13

近年の教育をめぐる潮流：教育側

- 社会に対する説明責任・透明性の担保として、教育機関も国際的水準に沿って、教育の質を管理し、その管理能力と、卒業生の質を保証することが求められるようになった
 - 3つのポリシー（アドミッション/カリキュラム/ディプロマ）

12

スライド 14

**教育の質に関する社会への説明責任と透明性：
特に「見える化」する必要性が生じたもの**

- 学習者評価
 - 求められる能力が適切に目標として設定され、学ばれ、評価されているか？
 - カリキュラム開始前(入学時)～途中～卒業時までの連続性
- カリキュラム評価
 - 必要な能力が獲得できるように設計・運営・改善されているか？
(学習目標・内容・方略・評価、リソースなど)
- (第三者機関による) 教育機関の認証評価
 - カリキュラム構築・運営体制や自己改善機能は適切か？

13

第 17 回ファカルティ・ディベロップメント報告書

スライド 15

**根拠資料としてのシラバス
説明責任としてのチェック**

- 学習者評価
 - －求められる能力が適切に目標として設定され、学ばれ、評価されているか？
 - －カリキュラム開始前(入学時)～途中～卒業時までの連続性
- カリキュラム評価
 - －必要な能力が獲得できるように設計・運営・改善されているか？
(学習目標・内容・方略・評価、リソースなど)
- (第三者機関による) 教育機関の認証評価
 - －カリキュラム構築・運営体制や自己改善機能は適切か？

スライド 16

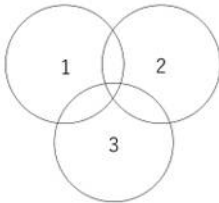
目標と評価：2つのアウトカムの強調

- 学習者評価
 - －**求められる能力**が適切に**目標**として設定され、学ばれ、**評価**されているか？
 - －カリキュラム開始前(入学時)～途中～卒業時までの連続性
- カリキュラム評価
 - －**必要な能力**が**獲得**できるように設計・運営・改善されているか？
(学習目標・内容・方略・評価、リソースなど)
- (第三者機関による) 教育機関の認証評価
 - －カリキュラム構築・運営体制や自己改善機能は適切か？

スライド 17

計画された/意図された学習アウトカム＝目標
学ばれた/達成された学習アウトカム＝結果（評価対象）
という形で見える化して管理することを社会から求められている

1. 計画された/意図されたカリキュラム
2. 実施されたカリキュラム
3. 学ばれた/達成されたカリキュラム



スライド 18

Q. なぜ「アウトカム」重視？
アウトカム/コンピテンシー基盤型教育とは

スライド 19

従来の医学教育	アウトカム/コンピテンシー基盤型教育	
学習者は何を学ぶべきか	プロセスではなく アウトカム を重視	学習者は、 卒業の時点で どんな能力を身につけて いるべきか
教育者は何を どう教えるべきか	学習項目・方法・履修時間 ではなく 能力 を強調	学習者は、卒業の時点で どんな能力を身につけて いるべきか
その学習項目を 何時間履修したか	カリキュラムではなく 学習者 に焦点	学習者は 、卒業の時点で どんな能力を身につけて いるべきか

(Frank, et al. 2010)

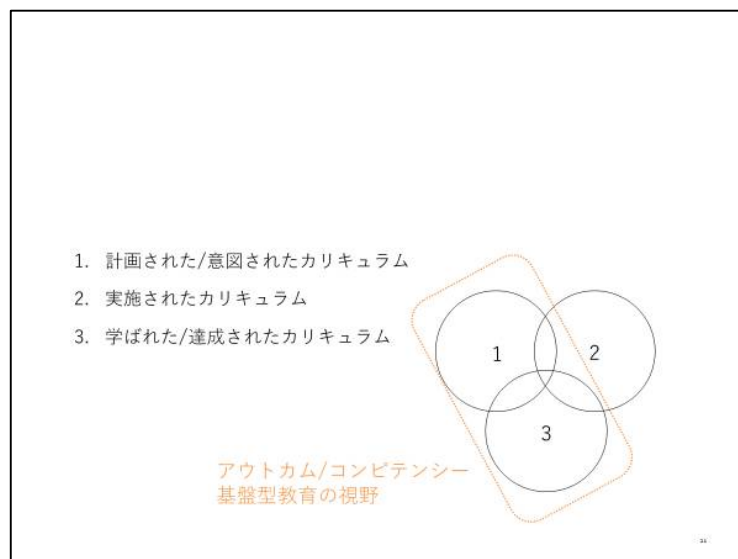
スライド 20

1. 計画された/意図されたカリキュラム
2. 実施されたカリキュラム
3. 学ばれた/達成されたカリキュラム

従来型の教育の視野

10

スライド 21



スライド 22

**（医学教育学における）
アウトカム/コンピテンシー基盤型学習の特徴**

- 能力を統合的・包括的な「コンピテンス（コンピテンシー）」として捉え、
目標＝学習アウトカムとして明示する
- コンピテンス、コンピテンシーの言葉の使い分けは曖昧 Frank, et al (2010)
 - コンピテンス：総称的
 - 医師の**パフォーマンス**の様々な側面における多様な能力
 - コンピテンシー：具体的・個別的
 - 知識・技能・態度などの領域にまたがる、ある能力 an ability
- コンピテンシーは必ずしも目に見えない：測定（評価）により獲得できたか確認できる
 - －観察評価可能な目標にすべき、というのが医学教育の基本的スタンス
- コンピテンシーは生涯かけて成長し続ける：カリキュラム終了時点で求められる能力レベル（「アウトカム」、評価基準）の明確化が必要

スライド 23

コンピテンシー（コンピテンス）とは？

世界と関わり世界で**行為する**ために、学習のプロセスに対する省察的なアプローチとともに、知識、技能、態度・価値観を結集して動員する能力

A competence is the ability to mobilise knowledge, skills, attitudes and values, alongside a reflective approach to the processes of learning, in order to engage with and act in the world.

OECD (2016). Global competency for an inclusive world. Paris: OECD.

第 17 回ファカルティ・ディベロップメント報告書

スライド 24

従来の医学教育 における学習目標	アウトカム/コンピテンシー基盤型教育 における学習アウトカム
一般目標、個別目標として 学習の方向性 を提示する	達成 を保証する
知識・技能・態度の <u>個別の領域に分類</u> される	医療者としての <u>包括的・統合的な能力</u> 、 <u>メタ</u> な能力が反映される
教育者から学習者に向けて、 網羅的で細かい 教育の方向性が 断片的に示される	全体像 が示されやすくなり、学習者が自分の 学習に責任を持ちやすい

Harden RM: Learning outcomes and instructional objectives--is there a difference? Med Teach 24: 151-155, 2001

スライド 25

例：卒後臨床研修医2年目に対する婦人科プログラム	
従来の医学教育における 学習目標	アウトカム/コンピテンシー基盤型教育 における学習アウトカム
一般目標：婦人科での入院・外来診療において、診断、治療、管理を行うために必要な知識、技能、態度を身につける 個別目標： 【知識】 - 女性生殖系の解剖、加齢に伴うホルモン環境の変化を説明できる - 婦人科特有のニーズや主訴の診断と治療を説明できる - 頻度の高い婦人科腫瘍の診断、治療について説明できる - 婦人科救急の診断と治療を説明できる - 周術期および術後管理が説明できる 【技能】 - 婦人科診療に必要な技能を身につける - 縫合・結紮などの基本的な外科手技を実施できる - 手術で専門医の助手をつとめることができる 【態度】女性の羞恥心に配慮した態度がとれる	プロフェッショナリズム：女性の人間性を尊重し、倫理面に配慮した診療ができる 医学知識と問題対応能力：入院および外来診療で一般的な婦人科的ニーズや主訴について診断と治療ができる コミュニケーション能力：女性のニーズや羞恥心などに配慮したコミュニケーションがとれる チーム医療の実践：看護師や薬剤師などの他職種、他科医師、認定看護師、専門チームと協働できる 医療の質と安全の管理：安全な医療を提供できる 社会における医療の実践：婦人科的ニーズや主訴に影響しうる社会的背景を踏まえ、疾病予防や健康増進に関する教育介入ができる

Q: 見比べてみて、どんなことに気づきますか？

スライド 26

なぜ「アウトカム/コンピテンシー基盤型教育」は カリキュラム構築論の主流になったか？
• 社会に対する説明責任と透明性の担保：「どんな人材を育てるか/育てたか」がより明確になる • 複雑化・多様化する社会への対応：細分化されたカリキュラムでは埋もれがちな能力も扱える • 教育の連続性：学習者の能力の到達点を明示することで、異なるカリキュラム間での連携や比較が可能となる

第17回ファカルティ・ディベロップメント報告書

スライド 27

医学教育モデル・コア・カリキュラム	臨床研修の到達目標
医師として求められる基本的な資質・能力	医師としての基本的価値観 (プロフェッショナリズム)
1. プロフェッショナリズム	1. 社会的使命と公衆衛生への寄与 2. 利他的な態度 3. 人間性の尊重 4. 自らを高める姿勢
2. 医学知識と問題対応能力	1. 医学・医療における倫理性
3. 診療技能と患者ケア	2. 医学知識と問題対応能力
4. コミュニケーション能力	3. 診療技能と患者ケア
5. チーム医療の実践	4. コミュニケーション能力
6. 医療の質と安全の管理	5. チーム医療の実践
7. 社会における医療の実践	6. 医療の質と安全の管理
8. 科学的探求	7. 社会における医療の実践
9. 生涯にわたって共に学ぶ姿勢	8. 科学的探求
	9. 生涯にわたって共に学ぶ姿勢

図 卒前・卒後の一貫性が図られた各項目 https://www.igaku-shoin.co.jp/paperDetail.do?id=PA03219_01

スライド 28

コンピテンシー基盤型教育への批判

- ・ 明示されたアウトカムの達成しか目指さない、凡庸な学習者を作り出す？
－ 「全ての学習者に求められる最低限の能力とは何か？」
- ・ 複雑で漠然としていて、現場での教育や評価にどう落とし込めばいいかがわかりにくいことが多い
－ 個々の教育機会での目標としては大きすぎ、より具体的な（サブ）コンピテンシー、さらに詳しいコンピテンシー、…という新たな細分化に陥る
- ・ 現場での具体的な振る舞い・行為として観察しにくい
－ 1つのコンピテンシーに知識・技術・態度が混在する
－ 実践という行為には、複数のコンピテンシーが同時に複合して現れうる

➤ 「コンピテンシー基盤型教育」がベストというわけではない

スライド 29

質疑応答

19

スライド 30

Q. シラバスを効果的・効率的に作成するためには
カリキュラム開発について何を知っておくとよいか？

スライド 31

「これらの整合性がとれているか？」

I. 目標の選択

- － どのような**目標**の達成が求められるべきか？

II. 学習経験の選択

- － **目標**を達成するためにどのような教育的経験が提供されるべきか？

III. 学習経験のオーガナイズ

- － これらの教育的経験はどのように効果的に組織されるべきか？

IV. 結果の評価

- － この**目標**が達成されたかどうかどのように決めるのか？

(Tyler, 1949) 》

スライド 32

アウトカム（コンピテンシー）・ベースドで
学習目標を記載するには？

- そのカリキュラム（プログラム）の目指す教育の包括的な目的を明確にする
 - － どのような専門職を育成するのか、教育のミッション（使命）、社会におけるその専門職の意義、カリキュラム（プログラム）修了時の能力
- その目的を実現するための具体的な目標を、期待される学習成果、能力という形で記述する
 - － このカリキュラム（プログラム）修了時点で、その教育機関が育成すべき人材は、どのような能力を行為として示すべきか？
- 個々の科目のシラバスでは、機関・学部レベルのコンピテンシー（ディプロマポリシー）を踏まえ、それを達成するための下位のコンピテンシーを作るイメージ
 - － 「将来どのような道を歩むにせよ、この科目をとる全員に最低限求められる能力とは何か？」

第 17 回ファカルティ・ディベロップメント報告書

スライド 33

要綱 p.2

11. 到達目標

- この科目を履修し、学修目的を達成した結果、どのような知識・能力などを修得できるか、観察可能な具体的内容を記載する。
各学部・研究科（学科・専攻等）の教育目標と整合を図り、到達目標に達しているかどうかを観察測定し、成績評価と結びつける。ディプロマ・ポリシー及びコースツリー上の当該科目の位置付けを踏まえて説明する。
- 学習者のレベルに対して、適切なレベルに設定する。

33

スライド 34

教育内容と教育方略：リソースに依存する

I. 目標の選択

- － どのような目標の達成が求められるべきか？

II. 学習経験の選択

- － 目標を達成するためにどのような教育的経験が提供されるべきか？

III. 学習経験のオーガナイズ

- － これらの教育的経験はどのように効果的に組織されるべきか？

IV. 結果の評価

- － この目標が達成されたかどうかどのように決めるのか？

(Tyler, 1949) 34

スライド 35

要綱 p.3-4

12. 授業計画と内容

- 授業スケジュールと毎回のテーマ等を記載
原則として各回記載
但し、例外的に一体的・相対的に学修する方が教育上の効果が高いことが明白な場合、及びリアルタイムの話題を組み込んで実施する方が効果的な場合は、その旨を記載した上で〇～〇回とサブテーマごとにまとめて記載することも可
複数教員で担当する場合は、それぞれ担当する週（回）に担当者氏名を記載
- 各授業科目の形態や単位数等に応じて必要な授業回数分（フィードバックを含む）を明記
例：半期 1 単位の講義科目の場合は 8 回、半期 2 単位の講義科目の場合は 15 回
※必要な授業回数に、試験の回を含めることはできない。
- 対面授業科目においてメディア授業を実施する授業回については、各回のテーマの末尾に下記の【記載例 6】により具体的形式を記載。なお、当該授業の受講場所は事前に受講する学生に周知しなければならない。
- 到達目標を達成するために必要な学習内容を明示する。
- どのような教育方略でその内容を扱えば目標を達成できるかを検討し、順序立てる。なるべく多様な方略を組み合わせる。

35

スライド 36

I. 目標の選択

- どのような目標の達成が求められるべきか？

II. 学習経験の選択

- 目標を達成するためにどのような教育的経験が提供されるべきか？

III. 学習経験のオーガナイズ

- これらの教育的経験はどのように効果的に組織されるべきか？

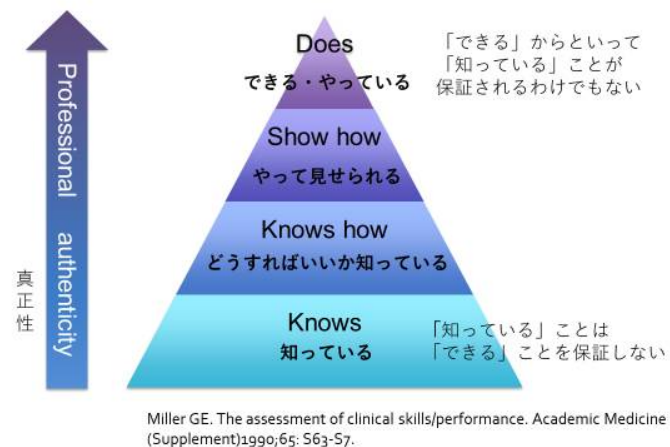
IV. 結果の評価

- この目標が達成されたかどうかどのように決めるのか？

(Tyler, 1949) 26

スライド 37

測定したい能力（の要素）と方法はマッチしているか？
アウトカムを達成したと判断する評価基準は明確か？



スライド 38

そのアウトカム（コンピテンシー）はどうすれば
評価できるか？その評価方法でいいのか？

- **Knows**：知識に関する認知の評価
–例：ランダム化比較試験について知っているか
 - **Knows how**：文脈のある中での認知の評価
–例：特定のシナリオを読み、適切な研究方法を選択できるか
 - 評価方法
–筆記試験（True or False, MCQs, 短文/長文での論述など）
–口頭試問
- （その「レポート」で何を評価したいか？）

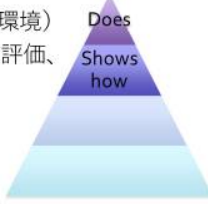


スライド 39

**そのアウトカム（コンピテンシー）はどうすれば
評価できるか？その評価方法でいいのか？**

- **Show how**：設定された場面での技能・行動の評価
 ー例：モデルデータを用いて適切に分析できるか
- **Does**：真の現場でのふるまいの評価
 ー例：実際に現場で適切に禁煙指導をしているか
- 評価方法
 ー実技試験（OSCE、模擬患者による疑似環境）
 ーポートフォリオ、直接観察評価、ビデオ評価、活動記録（ログブック）など

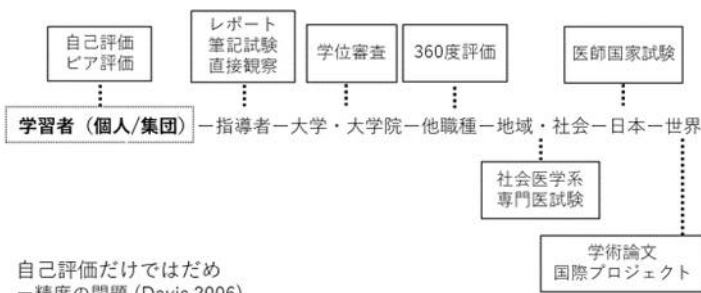
逆に、その目標設定でいいのかを
利用可能な評価から考えるのも大事



スライド 40

学習者を誰が評価するか？

ステークホルダーは評価すべき存在でもある



自己評価だけではだめ
 ー精度の問題 (Davis 2006)
 ー質保証にならない

スライド 41

要綱 p.6

14. 成績評価の方法・観点

- 各学部・研究科等が定める成績評価の方針等に準じて、評価方法（定期試験（筆記）／レポート／平常点評価 等）を記載
 評価方法を組み合わせる場合、割合も記載
 [平常点評価・・・授業への参加状況、小テスト、小レポート、授業内での発言 等]
 ※出席そのものに加点することはできない。
- 11. 到達目標に応じた評価をするにあたり、評価の対象となる要素、評価方針等を記載
 （ただし、部局等の単位で評価の対象となる要素、評価方針等を定めている場合はその旨記載することも可とする）
 ※各授業担当教員は、各学部・研究科等が定める成績評価の方針等に準じて、合格基準を定めること。
- 本授業科目における成績評価判定上の要件を設ける場合はシラバスに記載
- 成績評点の種別（6段階、2段階又は素点（100点満点）評価）を記載
- 到達目標を達成したと判断される評価基準を明示する。

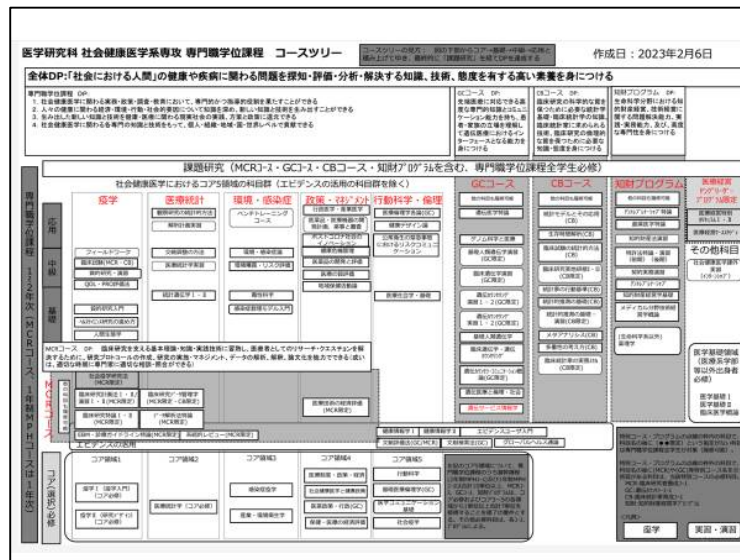
第 17 回ファカルティ・ディベロップメント報告書

スライド 42

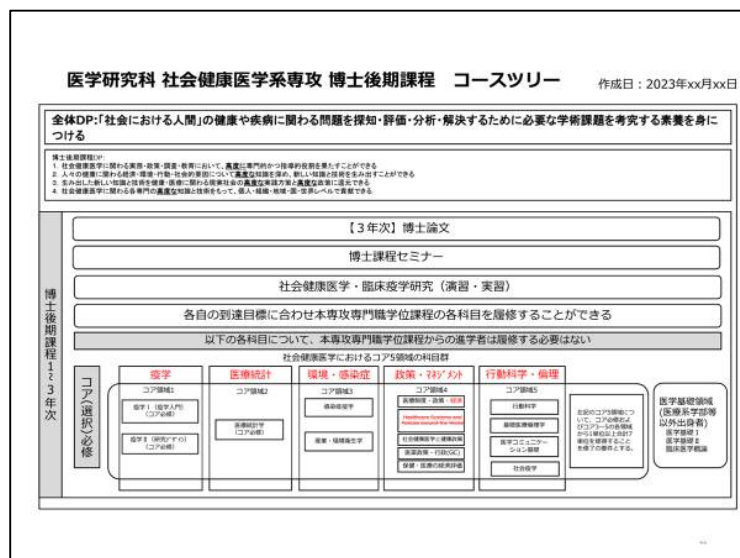
3つのポリシーとアウトカム/コンピテンシー（私見）

- ・学校教育施行規則の改正により、全ての大学は2017年4月1日以降、3つのポリシーを策定し公表することが義務付けられた
 - －アドミッションポリシー（AP: 入学受け入れの方針）
 - －カリキュラムポリシー（CP: 教育過程の編成・実施の方針）
 - －ディプロマポリシー（DP: 学位授与の方針）
- ・3つのポリシー作成のための教員教育では、（おそらく）アウトカム/コンピテンシー基盤型教育の枠組みが意識されていた
 - －DP=コンピテンシー？
- ・コースツリーでは関係性が明示されているが、どこまで個々の授業や実習、コースでこれらの関連性が意識されている？

スライド 43



スライド 44



スライド 45

図2 コンピテンスの領域ごとの科目達成レベル

田邊弘彰, 朝比奈真由美, 伊藤彰一, 前田康, 野口徳高, 古澤浩, & 田川まさみ. (2011). 千葉大学医学部における学習成果基盤型教育 (Outcome-based Education) の実証化・国際性のあるカリキュラム編成の工夫. *医学教育*, 43(5), 263-269.

カリキュラムマップ®

スライド 47

- ・「計画された/意図されたカリキュラム」の設計書

- 1

スライド 48

よりアウトカム/コンピテンシー基盤型教育へとシフトするならば、今後問われうるもの

- SPHとして掲げるアウトカム（コンピテンシー）とは、現在のDPでよいのか？それは（どのように）評価しうるのか？そもそも評価すべきなのか？
- そのコンピテンシーはどのような段階（マイルストーン）を経て成長していくか？各学年で習得が求められるレベルとは？
- そのコンピテンシーを獲得するために必要な知識・技能・態度とはどのようなものか？
- 各コース・各授業で、それぞれどのようなコンピテンシー（とそれを獲得するための知識・技能・態度）をどのレベルまで扱うか、そのオーガナイズや関連づけをどのように行うか？

スライド 49

おすすめの文献



スライド 50

References

- Cook, DA. (2010). Twelve tips for evaluating educational programs. Medical Teacher, 23(4), 296-301.
- Frye, A. W., & Hemmer, P. A. (2012). Program evaluation models and related theories: AMEE guide no. 67. Medical teacher, 34(5), e288-e299.
- Harden, R. M., & Laidlaw, J. M. (2012). Essential skills for a medical teacher: an introduction to teaching and learning in medicine. Elsevier Health Sciences. (ハーデン, R.M. 著, 大西弘高 監訳, (2013). 医学教育を学び始める人のために, 篠原出版新社.)
- Hodges, B. D., & Kuper, A. (2012). Theory and practice in the design and conduct of graduate medical education. Academic Medicine, 87(1), 25-33.
- Kern, D. E. (1998). Curriculum development for medical education: a six-step approach. JHU Press. (カーン, D.E. 著, 小泉俊三 監訳, 大西弘高 訳 (2003). 医学教育プログラム開発—6段階アプローチによる学習と評価の一体化, 篠原出版新社.)
- Tyler, R. W. (1949). Basic principles of curriculum and instruction. University of Chicago Press.
- Frank JR, Snell LS, Ten Cate O, et al. (2010): Competency-based medical education: theory to practice. Med Teach 32: 638-645.

2. グループ・ディスカッションで用いた作業ボード

ボード 1

グループディスカッション

- ・「交絡調整の方法」シラバスを改訂するなら
- ・これまでのシラバスの作り方（使い方）
- ・学んだことをこれからのシラバス作成にどう活かすか

ミニテストがあるのが特徴。

know how/knowsを目指しているのか？

欠席してもレポートを提出したらよいのか？」←コンピテンシーによると
成り立つ概念か？

ボード 2

グループ 1

それぞれのグループメンバーがシラバス作成ないし担当科目を充てられたことはあった。資料を作るのに
精いっぱいなこともあった。

- ・教科：前年度からの引継ぎをしていると、全体としての位置付けを意識できていない！京大SPHの中で
この科目をどうするといいのだろうか？

教授からいきなり「シラバスを作れたまえ」と言われても対応できない！

=>ワーキンググループを設置してディプロマポリシーについて話し合い、それを全教員が改訂に参画
し、さらに、外部評価を受けて、完成させる。

- ・ディプロマポリシーとコンピテンシー（京大SPHにはない？）を確認して全体の中で期待されている能
力について把握することが第一段階である。

=> コンピテンシーグリッドを作ってみてはどうか？行が各コンピテンシー、列が科目名、SPH内の全
科目の中で自身の科目が果たすべき役割

=> シラバスのフォーマットをより見やすくして、科目間の調整をできるようにすると良い。

=> シラバスのチェックポイントのようなものがあると頑張ります。あくまで客観的に（事実関係だけ
を）できている・できていないとチェックするシートがあると便利かも。

=> 学生からのフィードバックを事後に得ながらシラバス改訂の機会を設ける習慣

- ・特別に設置されたコースやプログラムがある：Specializedなものをもっと求められているのか？難し
すぎたかな？英語でやるべきだったかな？

・求められているアウトカムを満たせられていれば、後は講義の詳細ややり方などは自信を持って作っ
ていけばいいだろうなと実感

・アドミッションポリシーもコース参加要件などに大きく関わる。履修要件とあわせてシラバスに直接関
係する

ボード 3

シラバスの記載方法

グループ 2

コンピテンシーの内容も様々なレベルがある

対象者の書き方も工夫がいる？

現状でもかなり充実しているものもあり、どのように改善すべきか疑問

大枠をとらえつつ、評価方法の工夫も必要であり、一方で、細分化するの
も困難というのがとても難しく感じた

平常点とはなにか、工夫が必要

コンピテンシーの理想は理解するが、シラバスに記載するときには、詳細
を記載するには、なかなか困難な点がある。初学者にとって、概念的な目
標は分かりにくいかもしれない。
一つのコンピテンシーに関して、一つの講義だけでは完結できず、他の講
義との相互で達成していくことになるのではないかな。

今回のシラバスでも十分だが、どのようなことができるようになるのか、
例えば、達成すべき研究計画書の例があると、より分かりやすいのでは。
他、交絡や観察研究等、内容が分かっていない場合は、学生が判断できな
いのではないかな。

態度の評価についての記載があればよいのでは...チーム内で提案できる
力？

第 17 回ファカルティ・ディベロップメント報告書

ボード 4

グループ3

グループディスカッション

- ・ 「交絡調整の方法」シラバスを改訂するなら
- ・ これまでのシラバスの作り方 (使い方)
- ・ 学んだことをこれからのシラバス作成にどう活かすか

到達コンピテンシー

因果推論における交絡の重要性を理解し、それを調整する研究計画書を書ける。

この下に到達目標に書かれていることを書く。

各知識を評価するのではなく、knowsではなく、shows howのところを評価する。実際にactionするかどうかは卒業後の話。

シラバスのフォーマット、例、チェックリストや説明があるといい。

ボード 5

グループ4

「交絡調整の方法」シラバスを改訂するなら

ミニテストが特徴。どこを目指しているのか？

目指すところを明らかにする。

どのようなコンピテンシーかを書く。例「統計家として・・・する」等

ひとつひとつでコンピテンシーを作るのは非現実的
評価方法とその割合などを具体的に明示してはどうか？

・ これまでのシラバスの作り方 (使い方)

ガイドラインに沿って作った

これとは別に、詳細なシラバスを作っている

・ 学んだことをこれからのシラバス作成にどう活かすか

わかりやすくフォーマットをつくる

個別シラバスへの反映が難しい

ボード 6

グループ5

・ 「交絡の調整」について

目的はdoes, show howレベルだが、ミニテストで測れるのが
解析計画の中身は評価されるのか

ミニテストと平常点の評価における比重は

成績評価の客観性、peer評価くらいまではできる

・ これまでの経験

Show howまで考えられていなかった、知識面がメインだった

契約という意識までなかった

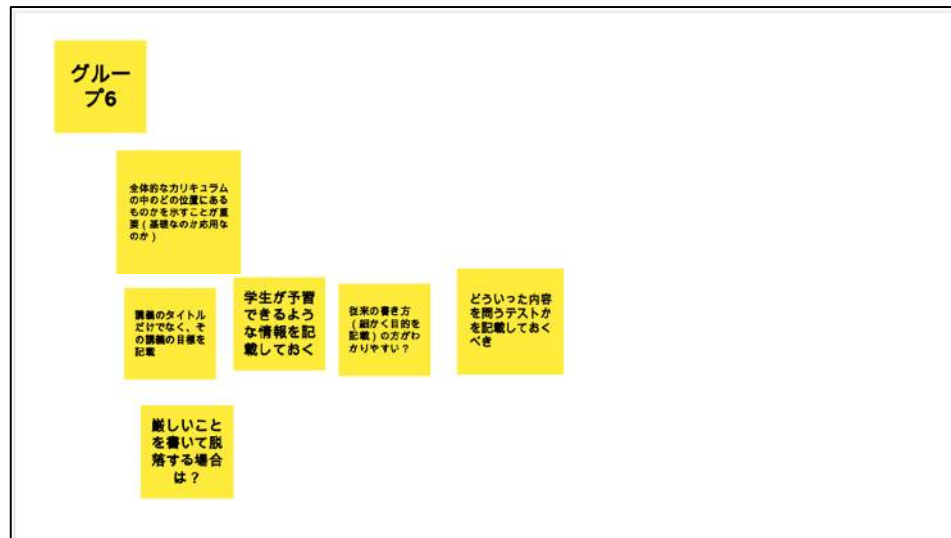
授業によっては評価が難しい (Doesは特に)

生成AIを使うことを推奨してみた。経験する機会を提供したが、10人くらいしか書いてくれなかった。

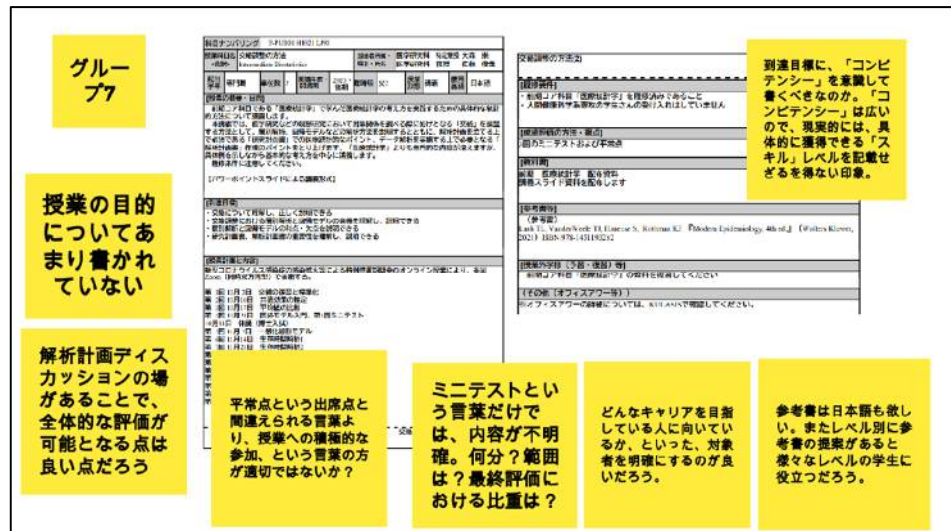
MPHに課題研究があるのは良いこと。総合力が分かる。

第 17 回ファカルティ・ディベロップメント報告書

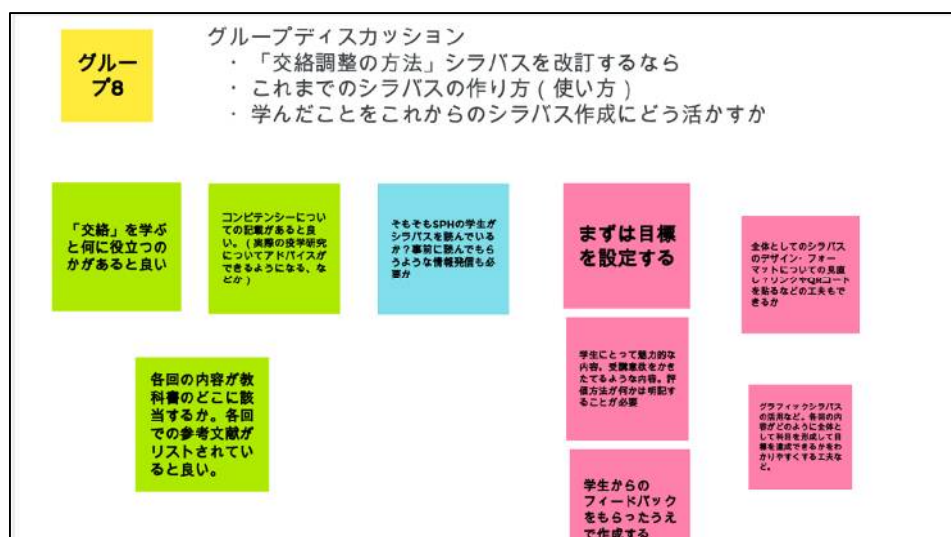
ボード 7



ボード 8



ボード 9



3. 事前・事後アンケート集計報告

■事前アンケート (回答 47 名)

職位：教授 11 名 (23.4%)、准教授 12 名 (25.5%)、講師 3 名 (6.4%)、助教 21 名 (44.7%)

教職員歴：1～5 年 24 名 (51.1%)

6～10 年 9 名 (19.2%)

11～15 年 8 名 (17.0%)

16～20 年 4 名 (8.5%)

21 年以上 2 名 (4.3%)

Q. シラバスを作成した経験はありますか？

ある 19 名 (40.4%)

一部作成したことがあり 9 名 (19.2%)

なし 19 名 (40.4%)

Q. 学生時代にシラバスを利用する際に感じることをあれば教えてください。

- ・ 授業の開始日時や場所が分からない、具体的な授業内容がイメージできないときがある
- ・ 毎年同じ
- ・ 漠然としすぎて困ることがあった
- ・ あまり読まなかった
- ・ 当時はリストのようなものしかなかったと思う
- ・ 学生時代にはなかった。
- ・ シラバスに書かれていた評価と実際が異なることがあって不満だった。
- ・ 分かりにくい 情報が乏しい
- ・ 参考書の記載は、自己学習に役立つので、記載が充実している方が良いと思いました。
- ・ 不便だったが、今は KULASIS とも連動して便利になった
- ・ 学生自体はシラバスを見たことはありませんでした。
- ・ 各分野でフォーマットが揃っていないので、比較が難しい
- ・ 単位の取りやすさ、単位の取り方、が一番の興味対象でした
- ・ 授業の開始日時や場所が分からない、具体的な授業内容がイメージできないときがある
- ・ 毎年同じ
- ・ 漠然としすぎて困ることがあった
- ・ あまり読まなかった
- ・ 当時はリストのようなものしかなかったと思う

第 17 回ファカルティ・ディベロップメント報告書

- ・ 見たことがなかった（あったかもしれないが記憶に残っていない）
- ・ あまり利用した記憶がありません。
- ・ 形式的であり、余り役に立たない。
- ・ この講義を取ることで何ができるようになるのか（何を知ることができるのか）を明確にすべきと思っています
- ・ 成績の評価基準や事前・事後課題が明確に記載されていないものがあった。
- ・ 時間割がわかりにくい
- ・ 教科書や参考資料の記載が具体的であると事前学習がしやすかったり、開講前に授業内容のイメージが持ちやすい
- ・ 科目によって、書き方、内容がかなり異なっていること。

Q. シラバス作成にあたり要綱があることを知っていますか？

知っている 17 名 (36.2%)、知らない 30 名 (63.8%)

Q. 作成したシラバスについて、シラバスの質を高めるためのフィードバックがあることが有用だと思いますか？

そう思う 40 名 (85.1%)、思わない 7 名 (14.9%)

Q. (シラバスを作成した経験がある方におたずねします。) シラバスを作成する際に、工夫している、心がけていることはありますか？

- ・ 見やすさを意識します。
- ・ 要綱にのっとって書く
- ・ 作成経験がありません。
- ・ 特になし。
- ・ 目的に応じて達成目標を具体的に明示できていること。評価基準を明らかにすること。
- ・ なし
- ・ わかりやすさ、誤解のない説明文、授業各回のテーマが何かを明確にする、採点方法についても明確にする、等を心掛けています。
- ・ 特に無い、他例に真似て内容の不足なく作るようにはしている
- ・ 経験がない
- ・ シラバスを作成した経験がございません。
- ・ 平易・かつ簡潔に記載し、学生の誤解を防ぐように努めている。
- ・ 経験なし
- ・ わかりやすさ
- ・ 開講までややタイムラグがあるが、実際に行う内容とズレないように心掛けています。
- ・ 作成経験がありません。

第 17 回ファカルティ・ディベロップメント報告書

- ・ 達成すべき目標と講義内容があっているかどうかを考えるようにしています。
- ・ 経験無しです
- ・ 前年度踏襲がメインです
- ・ 統一性、わかりやすさ、読みやすさ (too much にならないように)
- ・ あまりない
- ・ シラバス作成の経験がありません。
- ・ 学生さんが選ぶときの目線に立ちたい
- ・ 各項目の見出しを強調するなど、視覚的に見やすいように工夫している。
- ・ 要綱に定めてあることを守っているかを気にしながら作成する
- ・ 基本的に以前から存在しているものを踏襲している。
- ・ 1. 学生が利用しやすいこと。2. 読み手にとってわかりやすいこと。3. 作成側の教員の負担が少ないこと。

Q. (シラバスを(部分的にも)作成した経験がある方におたずねします。) シラバスを作成した際に、困ったことはありますか？

- ・ 他の経験豊富な教員からのオープンなフィードバックが得られにくいこと。
- ・ 詳細が決まっていないために書けない
- ・ 用語等の統一が難しい：授業なのか講義なのか、など
- ・ どの程度詳しく記載するか
- ・ 同じ領域でどんなシラバスがあるか手本がない
- ・ どう作成していいかわからない。授業を引き継いだ場合、どの程度変えていいかわからない。
- ・ 自分が担当する部分の全体における位置づけが時に分からない。(担当タイトルだけ提示されるので、内容が他の教官とかぶることがある)

Q. 次期の講義のシラバスを作成する際に (ことになった場合に)、困ること、悩むことがあれば教えてください。

- ・ 生成系 AI を利用した場合の評価の対応が大変そうである。
- ・ 指導要項などで要求される指導内容とシラバスの中身をどのように整合させてゆくの
か (どのように考えたら良いのか)
- ・ 人を惹きつけるシラバスにしたい
- ・ シラバスに盛り込むべき項目の具体的なガイドラインが欲しい
- ・ テンプレートがあると良いが、それはあくまでもどんな情報が最低限必要かを示すもので、魅力的なシラバス (および授業) をするには各自が工夫する以外にないのではないか。そこにフィードバックをもらえると向上できると思う。

第 17 回ファカルティ・ディベロップメント報告書

- ・ 作成時には学生がどのような知識的背景があるのかがわからず、記載事項を守れるかどうかが不安です。
- ・ 結局、前年とほぼ同様のものになってしまいます。
- ・ 外部講師のスケジュールをシラバス作成時までに変えます。
- ・ 複数の教官で担当する場合、その内容は各教官に任されるため、講義内容全体の重複や欠落の有無の評価が難しい。また、時に忬度が難しい。
- ・ 講義の構成、成績の評価基準の設定
- ・ 冊子のシラバスを継続するかどうか
- ・ 何か月も前から内容を決めてしまうので、学期が始まって面白い本や論文を読んで話したいと思うことが入れられなくなり、内容がマンネリ化している。

第 17 回ファカルティ・ディベロップメント報告書

■事後アンケート（回答 25 名）

職位：教授 8 名（32.0%）、准教授 6 名（24.0%）、講師 1 名（4.0%）、助教 9 名（36.%）、
その他 1 名(4.0%)

教職員歴：1～5 年 13 名（52.0%）
6～10 年 3 名（12.0%）
11～15 年 4 名（16.0%）
16～20 年 3 名（12.0%）
21 年以上 2 名（8.0%）

シラバス作成経験 あり 15 名（60.0%）、なし 10 名（40.0%）

FD 研修「シラバス再考」の講義の満足度を教えてください。（1（不満）～5（満足））

	1	2	3	4	5
人数	0	0	4	9	12
割合	0%	0%	16.0%	36.0%	48.0%

研修前に事前アンケートを行い、それを取り入れる形を取りました。この形式について満足度を教えてください。（1（不満）～5（満足））

	1	2	3	4	5
人数	0	0	4	10	11
割合	0%	0%	16.0%	40.0%	44.0%

小グループのディスカッションについて満足度を教えてください。（1（不満）～5（満足））

	1	2	3	4	5
人数	0	1	5	13	6
割合	0%	4.0%	20.0%	52.0%	24.0%

講義とディスカッションを踏まえ、今後のシラバス作成に参考となったことをご記入ください。

- ・ 「コンピテンシー」と「現行の到達目標」を、上位概念、下位概念と置いて理解できるのではと思い、参考になりました。
- ・ MPH コンピテンシーとシラバスの対応を明確にしなければならないと認識を強くしました
- ・ キャリアパスの観点も含め、学生側が授業をとるメリットの強調も大事だと思った
- ・ シラバスを作成する上で大切な考え方や目的は理解できたが、一方で実際に作成することを考えるとまだまだ手順としてわからない部分が多く残った。
- ・ コンピテンシーの言葉の意味がわかった。
- ・ コンピテンシーを意識します
- ・ コンピテンシーという概念がわかった。大きな目標（アウトカム）をふまえた上でのシラバス作成が必要だと思った。
- ・ 自身の担当講義が全体の中でどのような位置づけにあるのか、よくわからないところがあり、同じように感じている教員がいることもわかった。ディプロマポリシーなどを通じて振り返ることが重要だと気付いた。
- ・ 様々なレベルから、評価される、という意識を持って、シラバス作成に取り組みたいと感じた。
- ・ 従来からシラバスへの記載に求められていることが変化してきていること。専攻のディプロマポリシー、コンピテンシーも意識する必要があること。アウトカムの評価について、検討が必要なこと。
- ・ シラバスに関するディスカッションで、具体的なコメントが多かったのがよかったです。
- ・ まずは今のシラバスの充実をしたいと思います。他の講義との関連も考えたいと思いました。
- ・ 医学教育の背景がわかり勉強になりました
- ・ コンピテンシーが理解できた
- ・ シラバスの作成について大まかに知ることが出来た
- ・ コンピテンシーを意識すること。
- ・ コンピテンシーという言葉の内容について理解ができ、意識してシラバスを見直すきっかけになりました。またグループワークでのアイデアも参考になりました。
- ・ food for thought ではあったけど、じゃあ、どうするかは難しいですね。
- ・ 近藤先生がおっしゃったように、テンプレートと、例はぜったい必要ですね
- ・ 「到達目標のコンピテンシー」と、「コンピテンシーの評価方法」という見出しが良かったように思いました。しかし、科目ごとのそういう目標と、SPH として、あるいは京大としてのポリシーとの整合性、あるいはカバレッジは、また別の問題ですかね

第 17 回ファカルティ・ディベロップメント報告書

- ・ アウトカム/コンピテンシーの考え方は、シラバスの全体像を見直す上で非常に参考になると思いました。
- ・ 私はシラバスを作る経験をしてきましたが、作るたびにこれが何に役に立つのかとずっと思っていました。どう作るべきかもわからず作っておりました。今回の講義を聞いてどういう人を育てたいかという視点が抜けて落ちていたことがよくわかりました。若い教員が初めはものすごい期待をして授業をしてながら、受講者のモチベーションのギャップに悩み、徐々に講義が嫌になり、授業がいい加減になっていったことも何度か見ています。どういう人材になってほしいかということを伝えれる授業ができることはギャップの乖離をなくせていけるのではないかと思います。そうした思いがあるだけで、次に作るシラバスも授業も変わるような気がします。
- ・ シラバスに記載する内容と SPH 全体のコンピテンシーとの関連性がわかるようなシラバスの内容の作成を行うことが望ましいという認識にはなりましたが、個々の教員による個別の努力よりは、SPH 全体で統一的な手法を考え、その考え方に基づいてシラバスを改定していくのが良いと思いました。
- ・ Knows, Knows how, Show how, Does を区別してシラバスを作成しないといけないことがよく理解できた。
- ・ ミラーのピラミッドに当てはまらにくいかもかもしれませんが、「その科目（公衆衛生専門職として必須科目である疫学）について、講義後も自主的に学んでいく意欲と、そのための基礎知識の習得」というような目標を考えています。
- ・ コンピテンシーを意識したシラバスづくり
- ・ シラバス作成に関する基本のキの字を学ぶことができて勉強になりました
- ・ コンピテンシーについてや、目標に書くべきこと、その目標に対応する評価をする必要があること、など。

全体として研修へのご意見・ご感想を教えてください。

- ・ 大変有意義な研修でした。ありがとうございました。
- ・ シラバス作成は新任教員のみならず全教員が何度履修しても良い内容だと思いました。FD 機会を利用して教育の質の担保へまた繋がる内容にしていっていただければと思います。
- ・ 有意義だった
- ・ グループ・ディスカッションに対するコメントなどの時間がもっとあってもよかったと思いました。
- ・ ありがとうございました。
- ・ 教務委員長が触れられていましたが、次世代を担うリーダーシップ教育が本専攻のミッションのひとつであり、主な課題はそこにあるという認識で教育に携わっています。シラバスの充実がそのために有効かは疑問という考えにいたりました。

第 17 回ファカルティ・ディベロップメント報告書

- ・ ご企画ありがとうございました。医学教育学の深さや最近の話題の一部を体験できました。
- ・ 大変勉強になりました。有難うございました。
- ・ グループセッションの時間が少なかったので、テーマを絞っても良かったかもしれません。
- ・ 他の専門分野の先生方と交流する機会がそんなにないので、このような機会はもっと増やしてもらいたい。
- ・ SPH としてのおおきな方針決定に、特定教員は関われないと感じていて、そこは気楽さでもあるがもどかしさを感じることもしばしばある。
- ・ 事前のご準備を含め、様々にご対応くださり、誠にありがとうございました。
- ・ 「コンピテンシー」をどのようにシラバスに反映するべきかは難しく（組織としての合意形成が必要なもの）、どう修正していくかはこれからも考えていきたい。
- ・ 他の先生のお考えを聴くことができて勉強になりました。ただ、内容がすぐに把握するには少し難しく（抽象的な概念も多かったと思います）もう少し自分の中にかみ砕きたいと思います。"
- ・ 理論と実践がバランスよくまなべて大変良かったです。ありがとうございました。
- ・ 教員同士のインタラクションがほとんどないので、ディスカッションで少しでもそれが出来て良かった
- ・ この研修のコンピテンシーはなんだったのか。
- ・ とても有意義な内容だったと思いました。有難うございました。
- ・ とくになし
- ・ コンピテンシーという概念は理想としては理解できますが、シラバスに落とし込むと内容が曖昧になりそうで、実現が難しく感じました。上位概念を示すことは、初学者にとってはやるべきことの解像度が下がる要因ともなり得るため、字数制限がある中でそのさじ加減をどうするのか悩ましく思いました。
- ・ 毎回、もっと時間が長くあって、SPH の先生方と教育を考える時間が取れればと思います。年に 1 度しかない FD を、しっかり行い真剣に考え、議論するこの研修が好きです。学んだことを活かし、学生に届ける教育ができるように精進したいと思います。
- ・ これまであまり時間をかけて考えてこなかったシラバスやコンピテンシーについて考える機会を与えて頂き、感謝します。
- ・ ジャムボードは非常にやりやすかった。
- ・ シラバス作りを通して、自身の教育の在り方を振り返る貴重な機会となりました。宮地先生、ご講演、どうもありがとうございました。
- ・ 有意義な時間となりました。ありがとうございました。
- ・ テーマ設定から内容までとても良かったです。
- ・ シラバスの書き方だけでなく、目標の設定や評価の方法などについても学べ有益な

内容でした。

次年度 FD で取り扱いたいテーマがございましたらご記入ください。

- ・ 研究における個人情報の取り扱い
- ・ 評価手法について（例えばルーブリック法）
- ・ 教員の教育研究以外のタスクを以下に減らすか
- ・ 学生評価方法
- ・ 演劇手法を取り入れた他者理解教育（平田オリザ氏など）
- ・ 留学生に対するサポートについて（授業での取り組み他）
- ・ 留学生に対する配慮はどこまで求められるのか
- ・ 授業における学生の評価方法について
- ・ 国際化・留学生への教育
- ・ AP、CP、DP とその達成基準について、特性のある学生の支援について
- ・ 効果的なテストやレポート課題の作成方法
- ・ AI 技術の適切な使用法
- ・ FD の評価、目指すところ？
- ・ 今日、お話のあった評価のツールなどについてお話しいただきたいと思います。
- ・ 大学教育に関わる法律について
- ・ テーマはともあれ、グループワーク形式は引き続き採用してほしいと思いました。
- ・ 授業の英語化について
- ・ MPH のコンピテンシーについて
- ・ MPH のコンピテンシーについて
- ・ 批判的思考を育む教育とは（教育論）
- ・ シラバスに関する今回の FD からの次年度にどう活かされたのかの追加検討
- ・ カリキュラムについて（宮地先生）

以上